

学ぶ姿勢と柔軟な思考の大切さを肌で感じた内弟子修業 本間 薫



「もし、もう少し若ければ絶対内弟子をしてみたかった。」

そんな諦めていた気持ちを思いだしたのは会社を退職する 1 週間前でした。たまっていた有給休暇を消化するために突然発生した 2 週間の休みをどう活用しようかと思ったときに、「この年齢で内弟子やっちゃいけないなんて誰も言ってないよな？」とふと思い、五十嵐先生に相談しました。先生は韓国のユン先生の道場への稽古と小林道場の住み込み内弟子に快く協力して下り、私の希望は叶ったのでした。

小林道場での住み込み研修は、いままで月謝を払って合気道を学んでいた自分にとって、全てがとまどうことばかりでした。会員には許されて、内弟子には許されないこと。内弟子は常に先生や会員の方が稽古を万全にできる環境を整えるために、掃除やお茶の準備など、早めに来て用意をする。「誰か」がやってくれるだろう、と思うことを、その「誰か」に率先してならなければいけないこと。最初はいろいろなルールにとまどったものの、新しい環境や自分の立場を柔軟に受け止めることの大切さを知りました。

内弟子の仕事の中で一番好きだったのは、稽古前に道場長に袴をお渡して、稽古後に袴をたたむことでした。内弟子とは、先生の一番近い存在であって、先生の動きや望みを一番そばで感じられる、最高のポジションであることに気づかされました。もちろん、いろいろな仕事は大変かもしれませんが、私にとっては特に苦ではなく、それ以上に先生達のそばで先生達の発している空気を感じる事が出来る近い存在であることに嬉しく思いました。

また稽古中は、特に合宿でしか先生達の稽古に出ることがなかったので、なにか1つでも得られないかと思い、常に先生達に触れて技を感じたいと強く思いました。なので、指導員の方達との稽古は私にとって最高に近い学びの時間になりました。

そうやって時間を過ごしていくうちに、月謝を払っていたただの会員から「学ばせていただいている」という気持ちでどんどん育ってきて、もっともっと先生達が技を磨ける、そして会員の方





達が学べる良い環境を内弟子である私が作らなければならない、という気持ちが芽生えてきたのです。

残念ながらそう気づいたときは、ほとんど内弟子の期間が終了する頃でした。気遣いが苦手な私にとって気遣いをする意味とそれを自然にできるようになるまでの修業は、1週間では短すぎました。

私自身反省ばかりだったので、恐らく、かなりできの悪い内弟子だったと思います。

私のグラフィックデザイナーという職業は、クライアントの問題を感じて、それを解決するために自分自身で試行錯誤し、解決策を見つけてビジュアルで表現する仕事です。合気道で効かない技の問題を試行錯誤して答えを探す作業に非常によく似ています。こうであるはず、こうであるべき、と年齢を重ねるにつれて、経験がそうゆう思考を作っていくのですが、こうゆう世界もあるんだ、こうゆうやり方もあるんだと、柔軟に対応していくことで思いも寄らない答えが見えてくることに、この内弟子期間で体験することができました。新しい職場でぜひこの経験を生かしていきたいと思います。

社会人を経験して数年経った今、学ぶ姿勢と柔軟にその場に対応していくことの大切さを肌で感じる事ができた住み込み内弟子期間は、私にとっては非常に貴重な体験となりました。

辛抱強く見守ってくださった小林先生と小林道場の指導員の方々、一緒に稽古を楽しませて下さった会員の方々、さらに貴重な体験の後押しをしてくださった五十嵐先生、多くの方々にこのような機会を下さったことに非常に感謝いたします。本当にありがとうございました。

